
【主題】 児童は自律した学び手、教員は自走する集団をめざした教育実践

【副題】 ～単元内自由進度学習全校実施の取組を通して～

【学校・団体名】 石川県加賀市立庄小学校

【役職名・氏名】 校長 野田 美由紀

はじめに

本校がある加賀市は、教育ビジョン「BE THE PLAYER」を掲げ、『子どもの「今」も「未来」も幸せに well-being を実現する学びの改革』を全市で進めているところである。これまでの「みんな一緒に、同じことを、同じスピードで」学ぶことを過度に求める授業から脱却し、「自分に合った学習方法や自分らしいペースで、自分で学ぶ」という新しい学びを知り、本校でも「教える授業」から「子どもが学ぶ授業」へと授業改革を進めることにした。

そのような学びの実現には児童の自己調整力の育成が必要不可欠である。そこで自己調整力を育成する最適な学習方法である単元内自由進度学習に全校で挑戦することにし、「自律した学びの実現」「子どもに委ねる授業の実現」に向けてスタートを切った。

1. 自己調整力を育成する単元内自由進度学習の全校実施

(1) 昨年度までの本校の状況

①職員構成

本校は全学年1学級の小規模校である。職員構成の大半が若手教員であり、昨年度は担任8名中6名が20代、研究主任と管理職2名も他校から赴任してきたばかりという状況からのスタートであった。教員の授業づくりに対する意欲は高いが日々悩む姿があった。

②児童の実態

児童は真面目だが主体的に学ぶ姿勢が十分ではなく、学力にも課題が見られた。令和5年度当初、思い切っ て子どもに委ねる授業に挑戦してみた。しかし多くの児童が「先生分かりません。」と言って教師の前に列を作るだけであった。友達と相談することを促しても仲良しグループで何となく話をし、結局最後に教師が解説して終わっていく状態であった。

③単元内自由進度学習を主軸にした学校研究

令和5、6年度加賀市の研究指定校となり「子どもに委ねる学び」を研究推進していくことになった。そこでこの機会を活用し、自由進度学習を学校研究の主

軸にすることとした。

幸いにも、単元内自由進度学習の先進校視察を経験したことがある校長と教員がおり、イメージは持っていた。そして若手教員が多いことは課題に捉えられがちであるが、見方を変えれば柔軟で挑戦意欲が高く、ICTの活用にも長けているという長所になる。指導主事等に伴走してもらえば、完璧ではなくとも自分たちなりの単元内自由進度学習ができるのではないかと考えた。これまでも授業改善してきたが、同じ課題が毎年繰り返され、教員も閉塞感を感じているのであれば、根本から変えるしか解決策はなかったのである。

(2) 2つの授業スタイルの構築

授業の中で児童に身に付けさせたい力を「自己調整力」と「各教科等の資質・能力」とし、本校の授業スタイルを2つ考えた。「スタンダードスタイル」と「マイプランスタイル(マイプラン学習)」である。日々の授業は「スタンダードスタイル」、年間2回で「マイプランスタイル」を実施していくことにした。

①スタンダードスタイル

スタンダードスタイルは、複線化のある授業である。例えば学習課題の設定までは一斉指導、課題解決の過程では自分で考えたり、友達と対話したりしながら考える。その判断・選択は子どもに委ねる。再び一斉指導に戻って全員で考えの練り上げをしたり、個別で適用題を解いたりする。まずはこのスタイルの授業を日々行い、教師が「教える授業」から「子どもが学ぶ授業」へと変えていくことにした。

②マイプランスタイル(単元内自由進度学習)

「マイプランスタイル(マイプラン学習)」は単元内自由進度学習のことであり、児童が自分で学習計画を立てて自分で進めていく学習スタイルである。単元初めのガイダンス以外、学習展開中のほとんどを児童に委ねる。本校では、2教科の1単元ずつを1つのユニットとすることで、より児童の自己調整力の育成をねらっている。2教科をどのように組み合わせる学習計画を立てるかは児童が決める。教師は、児童が自分で学習を進められるよう、事前に教材を準備しておく。

本校では授業支援ソフトのオクリンクプラスを活用しており、学習内容等必要な情報はそこにしている。さらに具体物や掲示物を校内に設置し児童の学習を支えている。学習が苦手な児童が自分でできるよう準備を行い、具体物操作やタブレット端末での動画視聴など、児童が自分に合った学び方を見つけるとともに、教科の資質・能力が身に付くことを意識している。実施教科は、算数（図形領域）は全学級でそろえ、組み合わせるもう1教科は国語や社会、理科となっている。教材準備は時間の余裕がある夏季休業中と冬季休業中中心に行い、実施は2学期3学期1回ずつである。

マイプランスタイル(マイプラン学習)の流れ

ガイダンス ▶ 計画 ▶ 学習 ▶ まとめ・振り返り

単元全体の目標、内容、流れを知り、見通しを持つ	学習の手引きを参考にし、計画を立てる	学習カード等を使い、原則一人で学習を進める	学習内容の確認や学習の成果、学習方法を振り返る
-------------------------	--------------------	-----------------------	-------------------------

自己調整しながら自分で学習を進める



デジタルとアナログのベストミックスな学びの様子

自分らしく学ぶために自分で学習計画を立てる

Aさんの計画		Bさんの計画	
1	算数	1	国語
2	国語	2	国語
3	算数	3	国語
4	算数	4	算数
5	国語	5	算数
6	国語	6	国語
7	算数	7	国語
8	算数	8	算数
9	国語	9	算数
10	算数	10	算数
11	国語	11	算数

この2教科をどのような順で学習していくかは児童が決める。

子どもによって算数と国語の学習順が異なる。

2教科の学習順は自分で決める

③ ICTの効果的活用

自律した学習者にするために、単元の目標、単元計画、学習内容、ヒントカード、学習時間等の情報を児童のタブレット端末で全て見られるようにした。

一番効果的な活用は、教師の解説動画である。児童が学びを進める際、あらかじめ与えておきたい知識や文字だけではわかりにくい情報について、教師は解説を動画で録画しておき、児童用端末に送信しておく。児童は必要なタイミングで何度でも視聴できる。

反対に、児童に説明動画を録画させ教師に送信させるという使い方もしている。教師はどこにいても端末で評価することができ、合格の児童には「大変よくできました」とフィードバックする。不合格の児童のために、合格した児童の説明動画を見ることができるよう設定してあるので、児童は自分の説明と比較・分析して考えの再構築ができるように工夫している。

④ 振り返りの重視

自己調整力は、子どもに委ねるだけでは育たない。自分の学びをメタ認知を働かせて振り返ることで育まれる。「自分がどういう学び方をしたからこういう学び

を得ることができた（できなかった）」という、学び方について振り返らせることにより、自分に最適な学び方について子ども自身が意識するようになる。今年度からは振り返りを書く時間も自分で決定している。

2. 持続可能な単元内自由進捗学習のシステムづくり

単元内自由進捗学習を実施するにあたり、担任一人が不安と負担を抱え込むことになっては、いくら自己調整力が育まれる学習方法であっても継続が難しくなる。そこで、小規模校でも、若手教員でもできる持続可能なシステムを作ることが管理職の使命と考えた。

(1) 時間を生み出す

まずは教材研究や教材づくりの時間を生み出す必要があると考えた。そこで日課の見直しを2回行った。現在週4日は15時下校、水曜日は14時前に下校が可能になり、放課後の時間が確保された。実際に本校教員の時間外勤務時間は他校に比べて少なく、充実した教材研究と教材準備が実現している。

(2) 空間を生み出す

本校の校舎は、空き教室が全くない状態である。マイプラン学習を全校実施するため、特別教室の不要なものを廃棄し、新しい空間を生み出した。廊下も階段踊り場も学びの場とした。最も大きな改革は、加賀市の学びの空間づくり事業を活用した、多目的室と隣の図書室の一体化である。情報活用能力育成のためである。壁を抜いて行き来を自由にしたことで、図書とICTのそれぞれのよさを生かした学習がスムーズになった。今年度はプロジェクター型電子黒板を設置し、ICTと図書のベストミックスな学びが実現している。

(3) 伴走者とともに

単元内自由進捗学習は東京学芸大学佐野亮子先生にご指導いただいている。さらに、加賀市教育委員会のプロジェクトマネージャー（授業づくり伴走者）や県教委指導主事等を複数回要請した。授業づくりの伴走者の存在は大きな安心感につながった。また伴走して下さる指導主事等にとっても単元内自由進捗学習が初めてであり、「みんなで生み出す」という一体感を持ったことにも大きな意味があった。

(4) 理解者を増やす

単元内自由進捗学習は従来の授業イメージとは全く違うため、年度当初から育てたい児童の姿について保護者に繰り返し発信してきた。マイプラン学習の実施時期には、保護者・地域説明会を行い、校長が説明す

るとともに、全校児童の学びの姿を見ていただいた。

多くの方から「1年生でも端末を上手にを使って勉強していて驚いた。」「これは将来につながる力を育てていると分かった。」「わが子が自ら教科書で調べたり、友だちに聞きに行ったりしている姿を初めて見て感動した。」などの感想があった。保護者や地域の理解と応援をいただけたことは、我々の励ましと自信になった。

3. 校種や地域を超えて他とつながり、ともに高まる 教員集団の形成

(1) 市内小学校との連携

市内の小学校からぜひ学びたいという依頼があったため、校内研修会はオープンにしてきた。志同じくする教員がつながり、互いの実践を交流する場を自主的に生み出している。また本校の取組を参考にし、自校でアレンジした学びを展開している学校が増えている。

(2) 校区中学校との連携

校区中学校の教員が多数来校し、児童が端末片手に学習場所、学習形態、学習方法を判断・選択・決定し、のびのびと学ぶ姿に驚いていた。このような児童が進学してくるからには早急に授業改革をする必要を感じ、学校全体で子どもに委ねる学びに挑戦している。主任同士の連携も生まれ、管理職のコーディネーターがなくても実践交流や情報共有が行われており、9年間を意識した資質・能力の育成になってきている。

(3) 他市小学校との連携

昨年のマイプラン学習では、のべ400名の教育関係者が来校した。単元内自由進度学習をやってみたいという学校には全てをオープンにして伝えてきた。

現在、市内・市外複数の小学校が本校を参考にして研究を進めているほか、兵庫県、長野県等からも依頼があり、ともに授業づくりを進めているところである。

(4) 沖縄県恩納村教育委員会との連携

昨年度恩納村教育委員会、管理職、教員が本校視察に複数回訪れたことをきっかけに、本校のマイプラン学習をモデルに恩納村全小中学校でも自由進度学習に取り組んでいる。今後も実践者レベルでの交流を充実させていくことになっている。

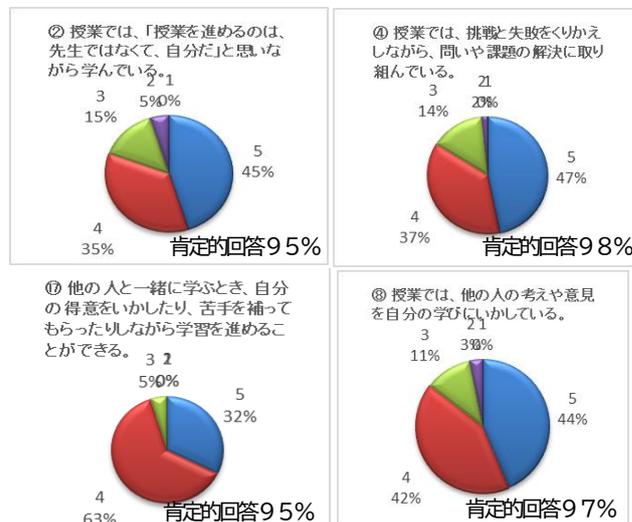
4. 単元内自由進度学習を実施したことによる児童と教師の変化

(1) 児童の変化

①自己調整力、主体性、集中力の伸長

自己調整力を何とか数値化できないかと考えていたところ、加賀市教育委員会から全小中学校で「児童生徒の自己評価を回答方式とした主体的・対話的で深い学びのための意識・実態調査ScTN(スクタン)」での測定を行うことになった。

その結果、以下のような良好な結果が見られた。



肯定的回答 青:いつもそうだ 赤:だいたいそうだ 緑:ときどきそうだ

児童自身の振り返りからも自己調整力の高まりがうかがえる。5年Hさんの振り返り(一部抜粋)を紹介する。

【マイプラン2学期】

いろいろな方法で考えたけどわからなくて友達に自分がわかってできるまで説明してもらったことがよかったです。

【マイプラン3学期初期】

今日は友達に聞くとわかり、理解したらノートにまとめることもできました。休日に自学で復習したいです。

【マイプラン3学期後期】

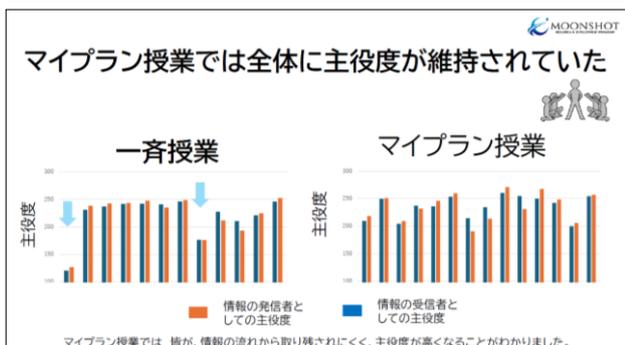
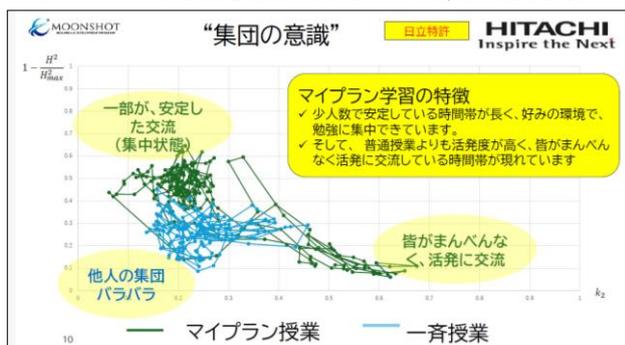
仲のいい友達としていて自立する力が弱いと最後に気づきました。これからのマイプランは自分のために自分で考えて学習していきたいです。

【マイプラン3学期後期】

解説動画を作るために具体物のある家庭室に行ったり、誰もいない静かな放送室に行ったりできました。計画も立て直して11時間で全てできるように工夫して頑張りたいです。

さらに本校はR5年度より内閣府ムーンショット型研究開発事業に3年児童13名(含特別支援学級2名)が協力している。加速度計によるネットワーク解析により、授業中のストレス状態や心の安寧、コミュニケーション状態を測っている。一斉授業とマイプラン学習を比較したところ、マイプラン学習がいかに児童の主体性、集中状態を生むかが明らかになっている。

〈ムーンショット研究事業 ネットワーク解析の結果より〉



青とオレンジの棒グラフは3年児童個々の情報受信・発信の主役度を表している。一斉授業では主役度が低い児童がいるが、マイプランでは主役度が上がり、誰一人取り残されない状況が生まれていることがわかる。

②学力の向上

今年度の全国学力学習状況調査の結果から、全国平均、県平均を大きく上回る結果となった。また県独自の基礎学力調査においても大変良好な結果となった。自由進度学習に取り組んだことで、中～下位層児童の学力向上が顕著であったことが分析よりわかっている。

③自分で学校を創るという意識の高揚

校長ビジョン「自分から考え、動き、生み出す ～幸せな学校は自分たちでつくる～」の浸透と2つの授業スタイルにより、子どもたちの意識が確実に変わってきた。年度当初の委員会活動では、「幸せな学校を作りたいから、自分は〇〇をするために◇◇委員会に入る。」という前向きなモチベーションをもった児童が増えた。クラブ活動においても企画書を書き、校長室へプレゼンに来て発足の了承を得る行動を起こしていた。「自分や自分たちが幸せになれる学校」にするために、考え、動き、生み出す子どもたちに育ってきている。

(2) 教師の変化

①生み出すことを楽しむ教員集団の形成

マイプラン学習への挑戦で思いがけない発見があった。それは教員が自分の個性や持ち味を生かした教材づくりをしたことで、創造性とやりがいが高まったことである。工夫と愛情込めて作った教材に児童が前のめりになって学習する姿を見て、感極まり涙する教員

の姿があった。また教材準備が遅れている教員がいれば進んで手伝い、さらには養護教諭や事務職、教育支援員、管理職も参加して準備・設営し、皆で生み出す楽しさと一体感を感じることができた。

②単元構想力の向上

日々のスタンダードスタイルの授業では、資質・能力の育成に向け、単元のどこを一斉指導し、どこを子どもに委ねるかを考えて単元構想するようになった。

子どもに委ねるのならば、「なぜ委ねるのか」「どうやって委ねるのか」「誰一人取り残さないためにどんな手立てが必要か」など、無責任な放置にならないよう丁寧な授業づくりが意識されている。

③ICT活用能力の向上

子どもに委ねる学びでは、日々ICTを活用するため、教師のICT活用能力が高まった。現在は、オクリンプラス、Canva、miroなども活用し、授業のねらいに合わせた意図的活用へとレベルアップしている。プロジェクター型電子黒板の導入で、ICTを活用した授業の質的向上も見られる。

④自らの実践を語る

多くの学校視察のおかげで、教員が自分の実践の価値を知ることができ、挑戦してよかったという成就感を得ている。また、管理職や研究主任だけが取組を説明するのではなく、実践者一人ひとりが自分の言葉で語る場を積極的に作っている。実践を言語化することの難しさを感じながらも、言葉にすることで自分がやってきたことが明確になるとともに、何のためにやっているのかという目的の再確認にもなっている。何よりこの語り教員の資質向上になっていると感じている。

(3) 今後に向けて

2つの授業スタイルを実施して1年半になるが、両者のよさが相乗効果を成している。今後は、スタンダードスタイル授業における協働的な学びの質をさらに上げ、マイプラン学習に生かしていきたい。

また、他校の教員とのつながりが生まれ、ともに自律した学びの実現を目指す仲間となっている。特に自治体を越えた連携はこれまでにない試みである。互いの持ち味を生かし、ともに単元内自由進度学習を作ったならば、より多様な教材準備ができ、質の向上が期待できる。教員が自校の枠を超え、他とつながり自走する今の状態を継続し、今後も新しい学びの形を求め続け、「子どもと教師の学びの姿は相似形」であるよう研鑽を積んでいきたい。